

幻想物語 = 八雲紫の物語 = R

ライドウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想物語Ⅱ八雲紫Ⅱのリメイク版です。

こんかいside変更はありません。

本編の紫編が終わった後に連載します。

初めての方も楽しめるようにしています。

それでも苦手な方はブラウザバック。

感想、評価をどしどし受け付けます。

誤字・脱字報告歓迎

目次

第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
24	20	17	15	13	11	8	5	1

第1話

暑い暑い、夏の日。

私、八雲紫は・・・蝉時雨で騒がしい雑木林の中を歩いている。

この獣道の先にあるのは、私の恩人のお気に入り場所、人里に近いと言えば近いし遠いと言えば遠い場所である。

そんな場所に私は・・・彼が好きだった彼岸花の花束を持って向かっている。

「ふう・・・流石に真夏日。とつても熱いわね・・・」

恩人のお墓参りということで、歩きで向かっているけど・・・どうにも暑くて、スキマから扇子を取り出す。

この扇子も、彼と旅した際にもらったものだ。とつても硬くて、便利な扇子。今でも私の大切なものだ。

良さげな石に座り込み、スキマから麦茶入りの水筒を取り出し飲む。

「ぐくつ・・・ぐくつ・・・ぷはー。つめたくておいしいっ」

スキマに水筒を戻して日傘を取り出す。

そして、しばらく木陰で蝉時雨の音を聞く、そういえば彼と出会ったのは・・・蝉も鳴いていない梅雨入り前だったなあ。そう思いながら、立ち上がり獣道を奥へ奥へと進む。

|||||

そして、獣道を抜けると・・・そこには幻想郷が一望できる平原に出た。

平原と言っても、端っこが崖となっている崖上の平原だ。

「早いですね、映姫さま」

そして彼のお墓に線香を供えつけている閻魔、四季映姫・ヤマザナドゥがいた。

彼女は彼に罰を与え・・・その最期をみとった一人でもある。私の、恋敵だった人でもあるけど・・・

映姫さんは土ぼこりを払いつつ、立ち上がり私を見つめる。

「そう言う貴女は・・・おめかしして、堂々なまでに白ですね」

「お褒めに預り、光栄ですわ。映姫さま」

私がいつもの営業スマイルで、すこしだけ嫌味を言ってきた映姫さんに様づけて返す。

「やめてください、二人きりなんだから呼び捨てでいいですよ」

少しだけ気恥ずかしそうにしつつ、ジト目で私を見てくる。

こういうところがあつて映姫はかわいい。

「・・・じゃあ、遠慮なく・・・映姫は。今日は非番なの？」

そう聞けば、映姫はええ。と頷く。

今日はお休みなのね。ということは

「新しい閻魔でも派遣されたの？」

「私の有給休暇ときの派遣閻魔ですよ」

「サボり魔のあの人には苦労しそうね」

「そうですね。たまには本部の閻魔を困らせないと」

その愚痴に私は思わず笑いだしてしまふ。

映姫も私につられたからか、笑い出す。

|||||

「じゃあ、私はこれで。これから人里で買い物するので」

「その服で？」

「私服に着替えてから、ですよ。」

私は、そう。と返して手を振った。映姫もそれを手を振って返して、私が来た獣道を引き返していった。

映姫が見えなくなるのを見送り、お線香が供えられているお墓に向き直る。そつと・・・前のお彼岸で供えて枯れた花々を片付け、彼岸花をそつと挿し、持ってきたお線香に火をつけ供える。

そしてそつと手を合わせ目をつぶり、安らかに眠れるように祈りをささげる。

(師匠、師匠が望んだ・・・妖怪と人が手を取り合う世界・・・まだ土台だけど・・・できましたよ。)

この幻想郷は、師匠が望んだ妖怪と人が手を取り合う世界の・・・ほんの土台だ。

師匠が望んで、私に託さなければ・・・今頃、私はただ死んだよう

に人間社会を見ていただけだろう。

もしかしたら、会社を立ち上げて・・・妖怪ということを隠しひっそりと人間として生きたかもしれない。

・・・そもそも、師匠にあの時出会わなければ・・・おそらく私は、死んでいたかもしれない。

お墓から離れて、お花畑に座り込み。空を見上げる。

「師匠、また・・・あの時みたいな旅。してみたいですね・・・」

私は目をつぶり・・・あの時のことを思い出したのであった。

|||||

浅い洞窟の入り口付近で、足を抱えてじっと動かないようにする。

こここのところ梅雨入り前のせいで食べられるものが少なく、せつかくとつた猪も雨のせいで腐った。

・・・まあ、腐つてまだ3日だから。大丈夫だろう。なんか青白い苔生えてるけど。

そう考えながら、少ない力で目線が通るようにする。

梅雨入り1日前だと言うのに、忌々しく雨が降っている森、私は生まれてこのかたこの森から外に出たことはない。ましてや、この森では私より強い奴はいない。

だからだろうか、私は生まれてからずっと一人だ。別に孤独なんて感じてない、一匹狼でいい。だけど、こんなところに居たんじゃあ強くなることも何かを知ることもしない。

生まれて5年間、人間ならもう色恋の一つでもしている時期ぐらいだろうか。

そんなの心底どうでもいい。そう思って、無意味に息を続ける。

金髪のぼさぼさで長い髪も狩りの邪魔だし、そろそろ短く切りそろえようか。切り落とした髪は布団かなんかにでも使えそうだ・・・今年のはそれで越すか。

「・・・」

この森の入り口付近から侵入者の気配がする。

珍しいな、ここは人里からかなり離れてるし人間なんてめったに通らないただの無駄な道なのに。

私は腐った肉を頬張って力をつけ、洞窟から雨が降る森へと跳んだ。

木々をサルみたいに渡って入り口に移動する、途中になんか変な鳥がいたけど気にしないでおこう。

「変な鳥とは失礼な。これでも天狗ですよ!!」

「・・・!!」

なっ、此奴いつの間に。しかも、私の考えを読み取れるのか。

並走してきた天狗とやらを避けつつ、地面に着地する。そいつも力ラスみたいな翼を広げつつ安全に降り立った。

姿から見て知性あり、言葉を言えたつてことは野良じゃない、相当いいもん食って肉付きがいいなこいつ。

・・・今晚の為に殺るか。

「ままま、待つてくださいよお！私そんな戦いとか苦手なんですからあ!!」

よく息を吐くみたいに嘘をつけるもんだ。野生の勘から見てこいつは、まったく隙のない強者だ。

爪を妖力で硬化させ足に力を入れる。腕を地につけて四つん這いになってそいつを睨みつける。

そいつは何か、信じられないようなものを見たかのような顔をして二、三步後ずさる。

・・・いや、油断はしない。

力を貯めた脚で地面をけり、そいつの後ろに回って首に噛みつきこうとする。

そいつは前を向いたままで、棒立ちのままだ。・・・やれた。しばらくは鶏肉だな。

「なーんて、うそぴょーん」

瞬きした次の瞬間には私は地面にたたきつけられていた。

(なに、なんだ、いったい、なにをされ・・・)

私はそのまま意識を失うのであった。

第2話

・・・意識が覚醒する。腕を動かそうとするが・・・動かない、縛られたか。

さっきの女・・・確か天狗だったか、うまそうだったんだが・・・。

「おーい、聞こえますかあ？」

目を開けるとさっきの天狗。

私に同情しているのか、頭を撫でてくる。私はそれを噛みつこうとする。

「あわわわ!?危ないですよ!!歯形ついたらどうするんですか!!」

何かを訴えているが、さっさと私の処遇を決めてほしいものだ。殺すならばさっさと殺せばいい物を。

「ししよく、早く来てくださいよく。私じゃ怖くて扱えませんく」

「子供一人扱えないんじや弟子失格だぞ、明」

明、この天狗の女の名前か？その名前を呼んだ男が奥の方から出てくる。

何か変なものを腰脇に刺し、金のすこし整えられた髪、そして動きやすそうな和服と荷物らしい背負いものがある。

・・・筋肉だらけでまずそうだが・・・鶏肉はほとんど筋肉だし行けるか。

少しだけ力を出して、私の腕を拘束していた麻縄を引きちぎる。

そして、瞬間的に移動しその男の首元に延ばして硬化させた爪を突き刺そうとする。

だけど、そいつは伸ばしていた私の腕をつかみ、そのまま地面にたたきつけた。

あまりの衝撃で私の意識が飛びそうになるが、無理やり意識を維持してそいつから距離を取る。

「あわわ!?な、なんで!?しっかりと縛ったのに!!」

「力を隠していたか、火事場の馬鹿力のどっちか・・・だけど前者っほいな。」

なんだかムツと来たので、足に力を入れてそいつの後ろに移動す

る。

相手からは見えていないようで天狗がきよろきよろと周りを見だした。

「し、師匠!!ヤバいですよ、かなり強いっぽいんですけど!!」

「慌てるな、慌てたら負けだ」

冷静にしているし、こいつは私を捉えている。

腹立たしいので、高速でそいつの懐に飛び込み爪で引っ掻こうとする。

けれど、簡単にかわされた挙句・・・私の顔に向かって拳が飛んでくる。

それを私は頭突きで対応する。

「っ!!」

そいつの表情が痛みで少しだけゆがむ。私の頭は石より硬いのだ。

一瞬ひるんだそいつの腕をつかみ、膝蹴りをする。折ることは成功したけど・・・

折ったのになんでこいつ冷静に私を睨みつけれるんだ・・・こいつ人間か!?

「・・・」

「おーいてえ。」

「いや、痛いですんでる師匠は何者なんですか!？」

「人間」

「いや、人間は腕を折られたら発狂しますよ!!」

・・・本当に何なんだこいつ。

そんなことを考えていると、ぐうーと。私の腹の音が鳴ってしま

う。さつき食ったばかりなのに・・・あああ、もうお腹すいたー

「腹、減ってるのか?」

「・・・」コク

そいつがそういうのでおとなしく頷く。

すると、そいつが懐から笹の葉で包まれた何かを出して開封する。

そこには真っ白な・・・握り飯!?

「・・・」じー

「食うか？」

「・・・」コクコク!!

そいつ・・・いや、このヒトからその握り飯を受け取りかぶりつく。塩加減が絶妙で・・・ほのかに温かい。作ってからそんなに時間たつてない!!おいしい!!

もう一つ頂戴!!

「もう一つ?名前を覚えてくれたらな?」

「・・・」紫。八雲・・・紫

「そうか、ほれ。焦らずに食えよ?」

「・・・」うん

言葉なんて久々に使った。気がする。

でも、今はこの握り飯を食うのが最優先だつ。

「・・・あー、第三者から見るととんでもなく犯罪臭がするんですけど・・・」

知らんわ

「あやっ?!?扱い酷くない!?!」

第3話

あの日からわずか1週間、私は私が住んでいた森とは別の森で木々を蹴って移動していた。

もちろん、時雨さんがついてこれるように若干スピードを落として
いる。

「あやあ・・・早いですね。」

「しかもこっちをチラチラ確認してて、相当余裕そうだね。」

時雨さんとバカ天狗が何かを話しているが無視する。

戌より利く鼻を使ってこの森の全体図を覚える。

ここから西にしばらく歩けば川、南の近くに洞穴、北に人里のお
いで・・・東は元の森。

肉食動物や妖怪はいないけど・・・鹿か。

私は二人から離れてその鹿を狩りに行く。

|||||

木の上から鹿をしつかりと観察する。

4年は生きてであろうオス鹿、角はかなり立派だ。少しだけ感じられる妖力からもしかしたら最弱な妖怪を倒して吸収したかもしれないな。

その鹿は、開けた平原のような場所で草を食べている。

周りにはその鹿の群れの仲間なのか大勢の鹿が静かに座っていたり眠ったりしている。

・・・やるか。

足に力を込めて一気に飛び出し、その鹿の首がけて妖力で硬化させた爪を振り下ろす。

その鹿はとっさのことに気づけないようそのまま首をボトリと落とす。

「おー・・・これは立派な牡鹿。」

いつの間にか追いついていたのか時雨さんが見ていた。

見ていたのならもう少し早く出てきてほしいものだ。

・・・まあ、いいやいただきます。

「まった。」

狩った鹿をその場で食べようとすると時雨さんから待ったがかかる。

何で止めるんだろう、早く食べないと腐ってしまうのに。

そんなことを考えながら時雨さんを見ると、どうやら考えがあるよ
うなのでおとなしく従う。

時雨さんが懐から包丁を取り出すと、慣れた手つきでその鹿を解体
しだした。

そして後から来た天狗に何かの指示を出して焚火をし始めた。

「生で食べるより、焼いて食べたほうがおいしいよ。」

そういつて少し焦げ目の付いたお肉を渡してくる。

私はそれを受け取り、猫舌なのでちよつと食べずらかったけど食べ
た。

それは、生で食べる肉よりもおいしくて、何個でも食べたくなるよ
うな味だ。

「・・・！」

「気に入った？お代わりいっぱいあるから、食べた食べた。」

そう言つて、新しいお肉を渡してくれる時雨さん。

私はそれを受け取りかぶりつくのであった。

|||||

「・・・♪」

渡されたお肉を全部食べ切るといつの間にか時雨さんは、余ったお
肉を燻製肉にしまつていた。

火を使えばそんなことができたんだ・・・あのころに人間一人とつ
つかまえてやらせればよかった。

まあ当時は、やるかやられるかだったからたぶんやって食べてたん
だろうけど・・・

「さて、おなかも膨れたことだし。そろそろ行こうか。」

そういつて時雨さんが立つ、あの天狗も満足げなちよつとイラつと
する笑顔でふわりと浮かぶ。

私は、その言葉を聞いて立ち上がる。

次はどこに行くんだろう。

「んー、あの山でもものぼろつか。」

「?あの山って・・・げえ!?し、師匠!?あの山ってまさか!!」

「あ、やっぱり気づいちやう?」

「なんで家出したのに戻らなきやならないんですかやだー!!」

・・・うるさいなこのバカ天狗

やっぱりこりていないのでアホ天狗の頭をつかんで締め上げる。
そんなあほなことをやってても時雨さんは、ふふふ。と笑いながら歩いている。

その後ろ姿を見るとなぜだか、胸のあたりがあつたかく感じた……
「……………」

「ゆかりさーん、そろそろ放してくれないかな？爪が食い込んでいた
いんだけど」

「……………」イラッ

「ぎやあああつ!!ちよつ、本当につぶれ、あつおばあちや……あつ
あつ」

こいつ本当にアホ天狗だ。

このアホ天狗は天狗の里で呑気に暮らしていればいいのに、どうして家出なんてして時雨さんと一緒に旅をしてるんだろう。そう考えると、なぜだかさらにイラつとする。

「はあ……………」やつと解放された。」

だけど、そろそろ時雨さんに怒られそうなのでアホ天狗の頭から手を離す。

……………まあイラつとするけど、このアホ天狗はどこか憎めない。
でも本当に気がかりなのは……………

なんで、人当たりがよさそうなのに家出なんてしたかってことである。
る。

「はあ……………」帰りたくないなあ……………」

また同じセリフ言いつつ、アホ天狗はため息をつくのであつた。

第5話

あれからしばらく歩いたが、山にどれだけ近づいたかは分からない。

なんなら空が夕焼けに染まりつつあり、まもなく夕暮時を迎えようとしている。

「・・・さて、今日はここで野宿だね。」

「うへえ・・・やつとだあ・・・」

「・・・」

適当な草むらに座り、荷物を下ろす二人・・・ココだと獣の襲撃に会いそうだ。

仕方ないので落ち葉や枝を集めるついでに、洞窟を探してくるか・・・

そう思い、軽く跳躍してその場から離れる。

妖力を薄く広く広げて、気配と地形を感じ取る。

この周辺には・・・ああ、なんだ、山賊がいるじゃないか。

私は、その山賊の小屋に向かって飛ぶのであった。

|||||

「ぐっへっへっ、今日も大量大量。その辺の村を襲ってこんなに財宝が!!」

「さすがです親分!!」「その女、俺に下さいよ!」

「まあまあ、最初は俺が楽しむんだ。邪魔を・・・」

何か話している山賊にわざと見つけられるように降り立つ。

「なんだあ?だれだお前、ここが誰の住処か分かってんのか!」

ギャーギャーと騒ぐ人間の山賊を無視して、アジトである洞窟を見つめる。

うん、そこなら一晩過ごすのも問題なさそうだ。

「おい、きいてんの、がっ!」

触れてきた山賊の眉間に伸ばして硬化させた詰めを突き刺して殺す。

それを見た周りの山賊が一斉に刀やら槍を持って襲い掛かってく

る。

はあ・・・メンドクサイ。

~~~~~

そこからは一方的な虐殺だった。

妖怪であり、何体もの大妖怪を屠ったことのある私にとって、この山賊たちは全く脅威にはならなかった。こいつらの肉を食ってもいいんだけど・・・それなら時雨さんのおにぎりを食べたほうがましなので、適当に森に放り投げて野生の肉食動物に食わせるか。

ちなみに時雨さんたちにはばれないようにあまり出血させないように殺した。

さて・・・

「ひいつ!？」

この生き残った女の子はどうしよう。

明らかに怯えてしまってる。そりゃ目の前で虐殺を広げられたらそうなるよね。

どうしよう、時雨さんに相談するのもなあ・・・

「もう知ってるよ、紫ちゃん」

あ、また見られてた。

「まあ、山賊ぐらいなら人殺ししてもいいんじゃないかな。」

時雨さんって、本当に人間なんですか？

感性が妖怪のそれなんですが・・・

「まあ、今のご時世人の生き死には結構緩いからね・・・」

そう言いながら、時雨さんは女の子に近づいてなだめはじめた。

・・・なんかムカツとする。

「こんなに早く片付けるなんて、やっぱり”迷い森の悪魔”は伊達じゃないわね」

・・・何言ってるだろうこのアホ天狗。

## 第6話

盗賊のアジトで私は目の前にいる少女・・・って、言うよりかは少女に化けている小狐と必死に交流している。

(まさかあの時出てた悲鳴は本能的なアレだったなんて・・・)「・・・」身振り手振りで何とか伝えようとしている。

「・・・」あせあせ。(↑伝わってない)

ダメだそれは食べられるものって伝えられない・・・ええい。でもこれは仕方ないことなんだ。私が助けちゃったんだから・・・

(時雨さんめ・・・)

|||||

数分前・・・

「で？この人間、どうするんですか？」

と、バカ天狗が時雨さんに言う。

やせ細っており近くの村に送ってもまた出てきそうな予感もある。

「えっ、2人とも気づかないの？」

「何がですか？」「・・・？」

「その子、人間に化けてる狐だよ？」

「・・・！」ビクッ

「あや!」「・・・」

そう言われてみれば、なんだか少なからず妖力を感じれる。多分、妖怪狐の子供で生まれたけど捨てられて人間に化けて暮らしてたんだらうか・・・あ、涙目になって震えてる・・・なんか可愛いな。

「あ、そうだ。」

いいこと思いついた。と言わんばかりに時雨さんが立ち上がり私を見据える。

なんだろう、なんだかとっても嫌な予感がするぞ。

「紫ちゃんが助けたから、紫ちゃんが責任もって育てなさい。」

「・・・」

えっ!?

|||||

そんなこんなで、私がこの小狐の親となり育てることになった。旅にも連れていくらしく、私が責任者になること間違いなしだった。

「・・・これ、たべる？」

と、ちよつとだけ心が通じたのか小狐が言葉を喋る。

どうやらこの小狐を捨てた妖怪狐はかなり高位のようで言葉を少し教えていたようだ。

「・・・」コクコク

私が優しく頷くと恐る恐る口をつける。

このおにぎりは時雨さんから貰ったものではなく作り方を教えて貰いながら私が作ったもの。時雨さんにおにぎりくださいって言ったら作り方教えるから自分で作ってって言われた時は、驚いた。

「・・・おいしいー！」

一口食べて飲み込むと、眩い笑みを浮かべておにぎりをたべる。よかった、自信が無かったけど食べられるみたいだ・・・形が崩れたり時雨さんにダメ出しされたのをバカ天狗に与えて正解だった。

「おいしい・・・おいしいよおっ！」

おにぎりを食べながら涙を流す小狐。

私はそつと、その子の頭を優しく撫でて慰めるのであった。

ウワカツタイ!! ナニコレ、イシ!?

ちよつと遠くから聞こえてくるそんな声を無視しながら。

## 第7話

それからしばらく経ち、あたりは夜の帳にすつかり染まっていた。私はくう。くう。と可愛らしい寝息を立て私に抱きつきながら寝ている子狐を撫でる。

こういう感覚は初めてだが、なんだか守りたいという気持ちが湧いてくる。

「・・・すつかり、親の顔だね。」

時雨さんが子狐の寝顔を覗き込みながらそう言う。

オヤノカオ？それはどういう意味なのだろうか。

私には“オヤ”がいなかったから、そういうのは分からない。生まれつき、知識を持って生まれ、1人でも生きていけるように最初から肉体はこの姿だった。

「そこまで懐かれたなら、この子にも名前が必要だと思いますよ？」

と、バカ天狗が周囲の見渡しを終えて戻ってきたようでそういつてくる。このバカ天狗に言われるのは癪だが、言っていることは確かだ。このままこの子が旅についてくるのは明白だし、何しろ時雨さんが連れていく気満々なのだ。

「じゃあ、私からですね！」

ふふん。と無い胸を張るバカ天狗。

年下の私よりも小さいじゃん。

「あや?!言うて紫ちゃんは女性らしきなんてないじゃないですかー！」

「彩ちゃん。うるさい、起きちやうでしょ?」

バカ天狗：・射命丸しゃめいまる 彩は大声を出して師匠に笑顔で怒られる。そして私も、軽くゲンコツされる。なぜだ。

「彩ちゃんがうるさくしたのもそうだけど、元々は煽った紫ちゃんが悪いんだからね?」

まったくもお。といった感じで優しく怒る。

私も彩も反省の色で返す。

「よし、じゃあ名前を決めよう。玉藻、とか、どうかな?」

ワクワクしながらこつちを見る時雨師匠。

それはなんだか、聞いたことがある名前なので首を横に振る。

「えー・・・いいと思ったんだけどなあ。」

「じゃあじゃあ、鈴鹿御前とかどうでしょう!」

それもなんだか聞いたことがあるので首を横に振りながら固くむすびすぎたおにぎりを投げつける。

あたっ。という腑抜けた声をあげながらそれを齧りだす。

「もぐもぐもぐもぐ(それなら、紫ちゃんならどんな名前を付けるんですか!!)」

「・・・どんなのなんだい?」

二人が機体の目でこちらを見てくる。

名づけなど私は自信がないんだけど、期待するなら応えるしかないだろう。

彩はともかく時雨師匠は特にだ。

「なんだか、私の事馬鹿にしてませんか?」

「・・・?」

「その何の子って言う感じの顔、むかつくぅ」  
イラッと来たのでその辺の石を投げておく。

名前、この子の名前。どうしよう・・・自分の名前を与えてもいいのかな?

それなら、八雲・・・そういえば、私の好きな色っていれば、あの色だ。

あの珍しい花の色・・・たしか、あの色の名前は。

「ら・・・ん。」

「?」

「やくも・・・らん。」

その名前を言った途端、時雨師匠はいい名前だね。と言って、頭をなでてくれた。

・・・なんだか、気恥ずかしい。なので、頭を振って手を振りほどこき、時雨師匠をジト目で見つめる。

「あはは、ごめんね。」

笑顔でちよつとかわいく言つてもダメです。

「そんなー・・・」

そんなバカをやりながら、夜はさらに更けていった。

## 第8話

「ゆかりしゃまー！」

「・・・？」

藍が私の名前を呼びながら、私の周りをグルグルと走り回る。そのしっぽはブンブンと千切れそうな勢いで、それはそれは楽しそうだ。

「・・・」ちよいちよい

「??」

私がちよつと手招きすると、私の足に抱きついてくる藍。可愛いと  
思い頭を撫でると、えへへ。と、可愛らしい笑みを浮かべてしっぽを  
ブンブンと振る。

「師匠、なんですかアレ。尊いんですけど」

「いいことじゃないか。」

それをバカ天狗と時雨さんは、微笑ましいと言わんばかりに見つめてくる。

バカ天狗はともかく、時雨さんに見つめられると気恥しさも感じられて、なんだかとっても恥ずかしい。

|||||

ついさつき、昨日まで山賊の住処だった洞窟を立った私たちは、バカ天狗の故郷だと思われる山を目指して歩いてきた。なんでも時雨さんの実家はあの山の向こうにあるらしい。確か、モリヤとか言っていたような気がする。

「んー・・・中々、妖怪の山に近づかないね。」

「あや？確かに道はあつてるはずなのですが・・・」

「まあ、ゆっくりと行こうよ。」

そんな会話を、バカ天狗と時雨さんはする。

なんだかあの二人が会話をしていると胸の辺りがザワザワするのだ。なんというか、不快であった。

「さて、そろそろ夕方だし。野営の用意しようか」

「えーこのまま行って宿屋でも探しましょうよー！いい加減に柔らかいお布団で眠りたいですー！」





・・・何を会話しているのかが気になる。もしかしたらと言うこともあるかもしれない。

なので耳に妖力を集中させて、機能を強化し・・・会話に耳を傾ける。

「アンタは、この二か月の間にどれだけ罪を重ねるつもりなんだい？」

「・・・紫ちゃんに関しては、父さんがこうするだろうなって思ったから・・・」

「・・・なるほどね。確かに、雄吾の旦那ならやりそうだ。でもアンタはアンタだ。」

「やめてください小町さん、俺は・・・父さんのマネでしか、自分の生き方を見つけられないんですから」

「・・・そう、かい。」

・・・何の会話をしているのか全く分からない。

最初から耳に妖力を集めていればよかったかな・・・

「じゃあ、要件を言う。ついにアンタの裁定が決まったよ。」

「・・・いつまでですか？」

「二か月後、あんたは地獄に放り込まれる。」

・・・えっ？

「随分と、長いですね。」

「映姫さま曰く、執行猶予期間と、心の整理をつけるための時間だとさ。アンタにやあ丁度いい罰だとも言ってた」

「ええ、俺には十分すぎる罰です。」

さつき、聞いてしまったことで頭がいっぱいだが、小町さんと呼ばれた女性と、時雨さんは会話を続けている。

「むしろ、大和の自己中な神々は今すぐにと行ってきたけど、閻魔様たちは無視したね。」

「・・・そう、ですか。」

「・・・二か月後だ、そんな時にアンタの前にまた現れる。その時になったら、あんたが一人になってることを望むよ。」

「わかりました。じゃあ、お仕事頑張ってくださいね」

そう言って、小町さんはそそくさとどこかに消えていく。

「ゆかりしゃま・・・なかないで。」

大粒の涙をためる藍にそう言われてようやく、自分が泣いていると  
いうことに気づく。

藍が小さな両手で私の目からあふれる涙をすくいあげている。

・・・私は、その悲しさに押しつぶされるように藍を優しく抱き静  
かに涙を流すのであった。

## 第9話

その日の夜、焚き火の音がパチパチとなり、焚き火の周りには、バカ天狗が取ってきたであろう魚が棒で貫かれ炙られていた。

「ゆかりしゃまーこれ美味しいです！」

「・・・」ニコニコ

あの後、私と藍は泣きやみ。

何も聞かなかったことにして、普通にしていた。

時雨さんはその様子を微笑ましく見ていたが、バカ天狗はなにかに勘づいたようで細い目つきで私を見ていた。

「うあ、にっがーい・・・」

藍が魚から口を離し、顔をしかめる。

どうやら藍は内臓ぬきを忘れた魚を食べてしまったらしい。私はそっと、藍の魚とまだ口をつけていなかった魚を取り替える。ちよつとだけオロオロした藍に、ニコツと笑いかける。ペアつと可愛らしい笑みを浮かべて、渡した魚を食べだした。

そして、内臓ぬきを忘れていたバカ天狗を軽くジト目する。

「うっ・・・まさか自分用のさかなが藍ちゃんに行くなんて」

およよよ。と、棒読みながらも泣き真似をするバカ天狗。だけど、視線だけで私に後で話があると伝えてくる。

時雨さんはそれをただ笑ってみていた。

|||||

食べ終わったあと2人して周りの様子を見てくると言って焚き火から離れる。藍も着いてきたそうにしていたが、手で待つように指示し彩さんについて行く。

しばらく歩き、時雨さんの声が聞こえなくなるぐらいまで離れた頃合だろう。

唐突に彩さんが振り返り、そっと私を抱きしめてきた。

「・・・?!」

「大丈夫、わかってる。」

恐らく、彩さんは知っていたのだろう。

時雨さんの旅の理由を、だから涙の痕がある私を見て何かを察したらしい、抵抗らしい抵抗をやめ、甘んじてそれを受け入れる。

「・・・これで、何人目の女の子泣かせてるのよ。あのバカは」  
頭をそつと撫でられて、また涙が溢れ出す。

普段ならバカにするのだが今はそんな気力なんてない。

せつかく、連れ出してくれた人がいきなりいなくなるとわかってしまったのだ。

それこそほんの短い間でも、いなくなると理解したら心が苦しくなる程度には、私はあの人を慕っていた。

「大丈夫、今はたんと泣きな。藍ちゃんもいない、我慢しなくていい。」

そう言いつつ、頭を撫でながら私を強く抱きしめる。

私はその言葉に甘えて、声を上げて初めて大泣きしたのであった。

|||||

「落ち着いた？」

優しい言葉をかけてくれる彩。

前までは、頭の弱い天狗とバカにしてきたが、改めなくては行けないようだ。やっぱり、私より長く生きた妖怪だということを再認識したのだ。

「よかったよかった。紫ちゃんは、その笑顔が似合うんだから、泣き顔なんて似合わないよ」

まっ、お胸は小さいんだけどね！と、茶化したように言うバカ天狗。  
前言撤回、やっぱりこいつは馬鹿だ。

でも、その馬鹿さ加減が、彩の性格であり何より、彩自身の余裕から来ることをついさつき知ったので、前までの見下した感情は無くなっていた。

「ふふっ」

ふと零した笑みを見て、彩は顔を赤くしていた。

・・・やっぱり、彩はバカ天狗だ。